

かるべく、従て碑の建設せられたるも、此の可汗の時代にして、然もかく諸方の征伐の記されたるよりすれば、其の治世（808—821）中の末年に近き時なりしなるべきを信じて疑はず。

註〔一〕 和林金石録には「碑斷爲五」と記せり、然れどもかく五と數へたるは、碑のI、II行がソグド文の大なる斷片中に存するを數へざりしによること明らかなり。

〔二〕 假令ばX 60「後」を「道」と見たるが爲に「……領諸僧尼入國、闡揚自道、令慕闍徒衆、東西循環、往來教化」と讀みたれど、實は「……領諸僧尼、入國闡揚、自後 慕闍徒衆、東西循環、往來教化」と讀むべきが如き類即ち之なり。

〔三〕 *Altürkischen Inschr. d. Mongolei*, S. 285.

〔四〕 本編二〇九頁及び二八二頁註〔一〇二〕參看。

〔五〕 此の繼承は懷信可汗の繼承を指せるものなり、此の時に於る事情は本篇二一四頁に記せり。

〔六〕 本篇二一五頁參看。

〔七〕 *Un traité manichéen retrouvé*, p. 203.

〔八〕 XI 10—13 内外脩明。XI 30—37 治化國俗、頗有次序。XI 49—52 □□康樂寺の例に據る。

〔九〕 和林金石録も亦第二十四行の文字を載せたり。

〔一〇〕 Deveria 氏は頓莫賀可汗の時なりとし、Thomsen 氏は七八四年（即ち頓莫賀の六年）とするが如き之なり、Deveria 氏の説は一八九二年 *Société finno-ougrienne* より出せる *Inscriptions de l'Orkhon* の中に見え、Thomsen 氏のは一八九六年同學會より發行せる *Inscriptions de l'Orkhon*, p. 53 に見ゆ。

〔一一〕 *Altürkischen Inschriften d. Mongolei*, S. 285.

〔一二〕 *Die chinesische Inschrift auf dem uigurisch. Denkm. in K. B. S.* 6, 7.

〔一三〕 *J. A.* 1897 jan-fevr. p. 44